特別養護老人ホーム入居者の施設空間に展開する生活行動の場

— 個室型特別養護老人ホームの空間構成に関する研究 その1 —

A STUDY ON "ACTIVITY IN PLACE" OF ELDERLY RESIDENTS
IN NURSING HOME

Studies on spatial structure of nursing home with private rooms 1

橘 弘志*, 外山 義**, 高橋 鷹志***

Hiroshi TACHIBANA, Tadashi TOYAMA and Takashi TAKAHASHI

This paper aims to clarify relationship between behavior and spatial structure of a nursing home for the elderly, focusing on "activity in place" of the residents in common space. Methods used were mapping of activities of the residents, behavior observation and deep interviews. The survey was repeated five times in order to follow longitudinal change.

The findings are as follows. 1) Having private rooms, residents did not always withdraw into their rooms. 2) Several types of "activity in place" was observed in diverse place of common space, those had different meanings for the residents. 3) Each resident took part in various "activity in place" in everyday life on his/her own way, and as a result he/she formed diverse behavioral environment. 4) Especially semi-private space played very important role in personalization of common space by residents.

KEY WORDS: *The elderly, Nursing home, Behavioral environment, Common space, Private room, Activity in place*

高齢者、特別養護老人ホーム、行動環境、共用空間、個室、場

1. はじめに

1.1. 研究の背景と目的

急速に高齢化の進む状況の中、高齢者の生活の拠点として、在宅だけではなく特別養護老人ホーム（以下、特養）などの居住施設の担う役割もその重要性を増してきている¹⁾。特養はこれまで2～4人部屋が主流であったが、近年個室化の動きが進行中である²⁾。個室については、単に入居者の引きこもりにのみ意味があるのではなく、入居者が主体的に生活を行い、同時に自己を環境に関係づけ、新環境における新たな人間－環境システムの再構築に非常に重要な役割を果たしていることが分かってきた³⁾。ただし、各人が居心地のいい個室を持つが故に個室に閉じこもりがちになり、また入居者同士のコミュニケーションの機会が減少するのではないか、という点はなお懸念される問題点である。

しかし、共用空間が利用されるかどうかということは、個室の外側に広がる共用空間における物理的・社会的環境の質が大きく影響を与えている。施設の個室化を考える場合に、居室を個室にすることだけに目を奪われるのではなく、共用空間のあり方に注目する必要がある。とくに、入居者の身体・精神的状況や施設方針等により生活が施設空間内に完結しがちな特養では、共用空間の質が重要である。

近年、療養施設や居住施設の共用空間と入居者との関わりに着目した定性的な研究がなされてきている。入居者の居場所と生活行為から入居者の生活パターンの類型化を試みた研究⁴⁾や、病院の入院患者の事例から施設空間における行動の変化を定性的に記述した研究⁵⁾によって、人によりあるいは時間の経過により共用空間の使われ方が異なることが指摘されている。ただし共用空間の質のあり方との対応はそれほど明確に打ち出されていない。

本研究は、入居者の視点から施設の共用空間の役割と意味を明らかにし、個室型特養施設の空間構成のあり方を考察しようとする一連の論文である。入居者と施設環境との相互に影響し合う関係を捉えるため、複数の事例の比較から一般論を導き出すのではなく、1施設の事例に見られるさまざまな現象を詳細に拾い出し考察を加えていくという手法を取った⁶⁾。その際、段階的な空間構成を設計意図とした特養を調査対象とすることで、その空間構成を入居者の使われ方から評価することを同時に意図している。本稿は一連の研究の第1段階として、施設環境と入居者との相互に影響を及ぼし合う関係を記述する概念の導出を目的とする。「場」という概念を用いて個々の空間と入居者の行動との関係に着目し、入居者が施設に展開している生活の様態をなるべく定性的・記述的に捉え、施設の空間構成との関係を明らかにしようとするものである。

* 千葉大学工学部デザイン学科 助手・博士(工学)

** 京都大学大学院工学研究科環境地球工学専攻 教授・工博

*** 新潟大学大学院自然科学研究科 教授・工博

Researcher Assoc., Dept. of Design and Architecture, Faculty of Engineering, Chiba Univ., Dr. Eng.

Prof., Dept. of Global Environment Engineering, Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., Ph. D.

Prof., Graduate School of Science and Technology, Univ. of Niigata, Dr. Eng.

3. 施設に展開する場

3.1. 空間における行為

施設内の各空間（図3）における入居者の行動や人との関わりについて、インタビューをもとにまとめたものが表4である。施設内にはさまざまな空間が存在し、それぞれが多様な使われ方をしていいる。施設空間は設計時に「食堂」「機能回復訓練室」「デイコーナー」などそれぞれの空間に対応した機能が割り当てられているが、実際には入居者はそのような与えられた機能だけではなくそれぞれの要求にあった空間を見出し、そこで自分なりの使い方をしており、その結果入居者によって多様な意味付けがなされている。

3.2. 場の類型

これらに見られる場所・人・行為・他者との関係などをすべて含んだ状況を「場」¹¹⁾という言葉で表す。人がある場所・ある状況で何らかの行動をしたり、そこで社会的関係を構築したりすると、そこに場が形成されるものとする。それぞれの場には、その構成要素である、人・場所・行為・人同士の関係などの組み合わせから、いくつもの質的な違いが見られた。これを、a. 個人的活動 b. 親密な関係 c. 目的的活動 d. 自然発生的集まり e. プログラム f. 一時的交流 の6種類に分類した（表5・6）。

a. 個人的活動は、一人で何らかの活動を行いながら過ごしている場であり、リハビリ運動や散歩、お手伝い作業など明確な目的を持って活動している場合もあれば、TVやたまたま置いてある新聞を読むような手軽な行為、あるいはひとりで外を見ている場合まで含めている。場所の持つ機能に個人の目的が合致して利用する、もしくは場所の持つアフォーダンス¹²⁾を知覚した人がそこで行為を行うことで成立する場である。

b. 親密な関係は、施設内でよく行動を共にしたり部屋を行き来するような親しい友人・仲間同士、あるいは外部の家族や友人と過ごす場である。親しい仲間という完結した関係がまずあり、その関係を維持・発展させるのに都合のいい場所（誰にも邪魔されない個室や、共用空間であれば皆の集まる場所からやや離れて自分たちだけになれる場所など）が選択され、そこに集まって場が形成される。

c. 目的的活動は、お手伝い作業や共通の趣味活動など、ある目的を共有する人が集まってその目的を達成するために活動する場である。活動のために特定のメンバーが特定の場所で特定の時間に活動することによって成立する場であり、同じメンバーがそれ以外の時間・場所で場を形成することはほとんどない。

d. 自然発生的集まりは、人がそれぞれ自由に集まったり離れたりする場所で自然発生的に形成される場である。場を共有しているからと言って皆が同じ行為をしているわけではなく、メンバーもある程度は特定されるが状況ごとに異なっている。参加する人同士が直接関わり合っているというより、場所を媒介として間接的に関わっており、その気になれば直接的な関係も選択できるような緩やかなつながりの場である。

e. プログラムは、施設側の運営によって提供される食事・体操・入浴・各種イベントなどによって形成される場である。入居者は半ば参加することを強制され、そこでは場所・時間・行為ともに一方的に規定されている。

f. 一時的交流は、入居者同士や職員などと意図なしに出会うことで成立する一過性の場であり、反復性は少ない。施設内のどの空間

でも起こりうるが、人通りに面して一人でいられる場所など、一時的交流を誘発しやすい空間も存在する。

3.3. 場の類型ごとの意味

場の類型の違いは、人がその場に参加したときの環境との関わり方の違いを表しており、それは入居者にとっての意味が異なることを示している（表6）。

a. 個人的活動とは、他者と直接関わることなく一人で活動することで、他者に合わせる必要のない自分のやりたいこと、自分にとって重要なことを行っている。集団生活の中での自立性とそれに伴う自己の存在を確認することに繋がると考えられる。ただし、完全に孤立することを目指すのではなく、他のコミュニケーションの場を離れて眺めたり雰囲気を感じるなどして間接的に関わったり、あるいは一時的交流の期待を含んでいることがある。

（表5）場の特徴（○は特定、-は不特定）

	主体性	時	場所	人
a. 個人的活動	主体的	-	○	○（一人）
b. 親密な関係	主体的	-	-	○
c. 目的的活動	主体的	○	○	○
d. 自然発生的集まり	主体的	-	○	-
e. プログラム	受動的	○	○	○※
f. 一時的交流	偶発的	-	-	-

※は全員あるいは一部の特定の人（プログラムによる）

（表6）場のモデル図

場のモデル	場所の特徴	場の意味
a. 個人的活動 	・目的達成の機能を持つ場所 ・独りで居ることを誘発する場所、独りで居る理由のある場所 ・他の集まりからやや離れて眺められる場所	・目的の達成 ・目的を達成しうる自立性の確認 ・他者とは異なる自分にとっての活動 ・他者との間接的な関わり
b. 親密な関係 	・外部から邪魔されず自分たちだけになれる場所 ・他の集まりからやや離れて身を引いた場所	・仲良しの人との密度の高いコミュニケーション ・グループでの行動 ・グループに対する帰属意識
c. 目的的活動 	・目的達成の機能を持つ場所 （施設から与えられた場所）	・目的を達成しうる自立性の確認 ・施設での役割遂行 ・役に立っているという自己の確認 ・他者との交流
d. 自然発生的集まり 	・通路に面するなど人の集まりやすい場所 ・そこに行く何らかの理由のある場所 ・他者と直接視線を合わせる必要のない場所	・他者との間接的・直接的な関わり（選択可能） ・参加のしやすさ ・居場所の確保
e. プログラム 	・施設側がプログラムを提供する場所 ・プログラム提供のためにつくられた場所	・介護される側、提供される側としての自己の確認 ・集団の一員としての自分の再認識
f. 一時的交流 	・人同士の出会いやすい場所 ・独りで居て声を掛けられやすい場所	・他者との偶発的コミュニケーション

b. 親密な関係では、仲の良い友人同士で行動を共にすることによって、そのグループの中ではお互いを認識した「わたしとあなた」といった関わり方がなされ、さらに「わたしたち」といった帰属感が生じてくる。そこで行われる密度の高いコミュニケーションによって、自分が大勢の中の単なる一員に過ぎないのではなく、お互いに存在を認め合う人がおり、そういった関係を築いている自分を見出すことができる場である。ただし、すでに形成されたグループに対して新たにそこに参加しようとするときには、心理的な負担が伴うことになる。

c. 目的的活動は、皆で一つのことをすることよりも、その目的を達成することの方に重点が置かれている。そこで目的のある活動をするのできる自分、施設という社会の中で役に立っている自分を見出すことのできる場である。そこでの交流は付随的なものではあるが、メンバーは固定的で定期的に顔を合わせるため、それほど親密でなくともコミュニケーションの取れる機会となる。その場には（お手伝いなどの）明確な目的があるため、新たに参加することにはそれほど心理的負担は伴わない。

d. 自然発生的集まりは、参加する上で最も開かれた場と言える。それほど深いコミュニケーションには発展しないものの、気軽に参加・離脱が可能であり、コミュニケーションの契機になりやすい場である。b. 親密な関係やc. 目的的活動と比べ、場の内部においても他者との関わり方を選択でき、そこからは次第に関係を広げていくこともできる。そこでは自分こそが場への参加のし方や他者との関わり方を選択する主体であり、幅広い対象の人にとって自分らしく居られる居場所となりうると思われる。

e. プログラムは施設側が提供するもので、誰でも参加しやすいが、コミュニケーションの契機にはなりにくい。少なくとも大勢の人と顔を合わせる機会にはなっているが、そこでは集団による一斉活動をしている一人としての存在となる。あるいは、「介護されている自分」「施設からの提供を受けている自分」を見出すことによって（受動的ではあるが）自己の存在を確認する機会となることもある。

f. 一時的交流は、場の再現性が少ないものの、決して重要性が低いものではない。全く偶発的ばかりではなく、e. プログラムの前後のように人の動きが活発なほど、一時的交流も生じやすく、またa. 個人的活動から派生する場合も多い。その場合、一時的交流に対す

(表 7) 施設空間に展開する場

zone	空間	場	場の様子
private	居室	個人的活動 親密な関係	自分が他人に気兼ねせずに活動を行える場であるとともに、他者に気兼ねせずに個人的に親しい人と時間を共有できる場である。そこまで親しくない人の場合には心理的に立ち入らないという閾の高さがあり、その結果親しい人のみが選別されることになる。
semi-private	居室前の居間	親密な関係 一時的交流	その居間を共有する入居者たちによる親密な関係の場が見られることがある。居室の延長として、あるいは特定の人のみで共有される空間として、あるいは居室からsemi-publicなどの空間へ行くときに一緒に待ち合わせる準備空間として、意味付けがなされている。
	リハビリ空間	個人的活動 親密な関係	誰も居ないときに一人で運動をする個人的活動の場となったり、また仲のいい入居者たちが皆が集まるオープンな場を避けて仲間だけで集まる親密な場を作ることがある。semi-privateであるが、皆に共有される空間というよりも、皆からちょっと離れていたいときに用いられる。
	共用広間・テーブル	自然発生的 プログラム	みな自然と集まって会話したり、それぞれTVを見たり新聞を読んだりといった思い通りの行為を行っている。人が何となく集まり、出入りの自由な自然発生的集まりの場を形成する。その合間には、一人で本を読んだりTVを見たりといった個人的活動の場が出現するが、その場合もすぐに誰かが集まってくることを前提とした潜在的な自然発生的集まりと言える。またこの場所では、検温・おやつ・習い事など、東棟の入居者や比較的元気な人のみを対象としたプログラムが行われることがある。ここでの集まりに参加している人にとってはそのまま自然発生的集まりに移行していくが、そうでない人々にとってはプログラムの意味合いの強い場である。この空間で親密な関係の場が出現することはない。
	共用空間・畳	個人的活動 自然発生的 一時的交流 プログラム	広間のテーブルの隣にあり、空間の意味合いは似ているが、テーブルにおけるより中心的な集まりに比べ、周辺的・傍観的な位置づけをとることができる。廊下に直接面していることから、場への参加・離脱はより容易である。たまたま通りかかった職員と一時的交流の場を形成することもある。一人で座ってテーブルの集まりをみているという、個人的活動でありながら間接的に自然発生的集まりと関わりを持つこともできる。テーブルの集まりに普段参加していない人がプログラムにより広間に集められた場合に、テーブルよりもよりアクセスしやすい畳に集まり、プログラムの場が展開される。このほか、洗濯物畳みという形でプログラムが提供されることもある。
	廊下突き当たり	個人的活動	広間の集まりからちょっと離れて一人で外を見たり、喫煙したりするといった個人的活動の場が見られる。中には固定された個人的活動の場を物理的に構築して、TVを見ながら喫煙する専用の場所になっている例もある。
	電話コーナー	個人的活動 親密な関係 一時的交流	広間の集まりからちょっと離れており、電話を掛けるといった機能以外にも、喫煙しながら一人で過ごす個人的活動の場として、あるいは仲のいい人と二人で過ごす親密な関係の場として用いられることがある。空間として独立しているが孤立しているわけではなく、よりpublicな人々の動きを感じることで間接的な関わりを持ちながら居られる場所とある。通りがかった人と会話するなど、一時的交流もしくは自然発生的集まりの場が展開されることもある。
semi-public	食堂	プログラム 個人的活動	基本的に全員を対象とした規模のプログラムが提供される空間である。すなわち参加が前提となるかなり規定力の強いプログラムの場である。このようなプログラム以外では行かないという人も多く、その人々にとってはプログラムの提供されている時間だけが意味を持つ空間となっている。その間で、semi-privateの広間の集まりを避けて一人で過ごし、あるいは個人的・自発的にお手伝い作業をするなど、個人的活動の場が見られることもある。
	食堂カウンター	目的的活動	ここでは参加メンバーの固定したグループによって特定の時間に、洗いものやおしぼり畳みなどのお手伝い作業が行われる目的的活動の場が展開される。お手伝いという目的を共有したグループである。ときにはsemi-privateの広間の集まりを避けて一人で過ごす個人的活動の場が見られることもある。
	食堂畳	プログラム	食堂の畳は主に食堂でのプログラムを終えた後、集まった入居者によって引き続いてお手伝い作業などが行われることが多い。特定のメンバーによる自主的なお手伝いとは異なり、その場にいる人がほぼ強制的に作業に参加させられる、プログラムの場となっている。
	浴室前コーナー	プログラム 個人的活動	基本的に、入浴プログラムの待ちの空間として、職員によって連れてこられた入居者が集まる場として使われている。ときにはsemi-privateでの集まりを避けて一人で過ごす個人的活動の場が見られることもある。
public	デイサービスセンター	親密な関係	デイサービスは常に地域の（すなわち施設外部の）人と出会う機会を与えているが、入居者は誰でもオープンに話をするわけではなく、結局交流のあるのは昔からの知り合い・友人ということになる。そのような親密な関係を定期的に提供している。
	外部空間	個人的活動	外部空間は、何となく気の向いたときに使われることは少なく、かなり明確な意図と意志のもとに個人的に利用されており、個人的活動の場が展開されている。そこで個人的に親しくなって親密な関係へとつながることもある。

る期待が、プログラムや個人的活動に含まれることになる。

このようにそれぞれの場は、そこでの行為や交流だけに意味があるのではなく、その場所を入居者が自分なりに意味付けること、そしてそれに伴い自分の能力や帰属感、他者との関係性の中で自己アイデンティティを確認できること¹³という、その相互関係を表すものとして捉えられる。

3.4. 場の展開

施設の各空間にどのような場が展開され、その結果その空間が入居者によってどのように意味付けられているかを表7に示した。また、各領域ごとにどのような場が展開されているかを割合で示したものが図4である¹⁴。privateは、完全に外部から分離され、他者に気兼ねなく振る舞える空間として使われている。publicは本来的な外部の人との出会いの空間としてよりも、他の入居者から離れていられる場として選択されている。また、どちらも同じ中間領域として捉えられがちなsemi-privateとsemi-publicでは、空間の意味が異なることが分かる。semi-publicが施設全体のプログラムの空間として使われているのに対し、semi-privateは入居者同士の自然発生的な出会いの空間としての意味が強い。さらに、semi-privateではさまざまなレベルの共有のされ方を見ることができ、固定したメンバーによって強くシェアされたり、出入りの自由な緩いつながりであったり、集まり自体からは少し距離を置いて間接的なつながりを持ちながら、通りがかった人と一時的に会話を交わすなど、場所による意味付けのバリエーションも豊富である。

空間の段階的構成そのものが直接このような多様な場の展開を生じさせたとは言い難い。ただし、職員に管理されやすいプログラム空間としてのsemi-public¹⁵に対してsemi-privateが入居者側のコントロールが及びやすい（自分で居場所を選択しやすい）空間¹⁶となっていること、また段階的空間構成の中で多様な空間が生まれていることが、結果的に、各入居者が施設空間を自分なりの仕方で意味付けることを可能にし、次第に自らの行動環境を展開させていくことを支えていると考えられる。

4. 入居者の行動環境と生活類型

4.1. 入居者の行動環境¹⁷

それぞれの入居者が施設空間においてどのような場を展開させているかを見ると、入居者の施設空間との対応における生活の広がりが見えてくる。これはそれぞれの入居者が日常生活の中で個別に構造化した環境であり、行動環境の一つの表現と言える。これは単に利用する空間だけを示したのではなく、入居者のその空間に対しての関わり方を含んだ表現であり、つまり入居者にとっての施設空間の意味付けの一つの側面を示そうとしたものである。図4～8にいくつかの典型的な事例を示す。これを見ると、一つの施設に生活していても、生活スタイルやコミュニケーションのあり方は個人によって異なっており、体験している環境の質は異なっていることが分かる。

4.2. 行動環境の事例と生活類型

それぞれの事例は特徴的な生活の類型を表している。

事例1（図5）は、自室の環境を充実させており、そこで趣味の活動を行ったり客を招いて一緒に過ごすことが多い。自室外の共用空間も利用しながら、生活の行動基盤は自室に置いて自分にとって

(図4) 各空間領域に展開される場 (全調査時合計)

(図5) 事例1 81歳女性「自己充実型」

(図6) 事例2 77歳女性「閉鎖的コミュニティ型」

(図7) 事例3 75歳女性「開放的コミュニティ型」

凡例 PA: 個人的活動 CR: 親密な関係 OC: 自然発生的
GA: 目的的活動 PG: プログラム TC: 一時的交流

重要な活動を行っていることから、「自己充実型」とした。

事例2(図6)は、自室周辺の人と同郷と言うこともあって非常に仲が良く、お互いの部屋を行き来するほか、プログラムなどの行動を共にしたり、自室周りの共用空間で親密な関係の場をつくっている。このような固定的な仲良しグループが生活の基盤となっており、「閉鎖的コミュニティ型」とした。

事例3(図7)は、自室のすぐ外の広間のテーブルで過ごす時間が長く、頻繁に自室と広間とを往復している。そこに形成されている自然発生的集まりの場へ参加し、それほど親密に成らずとも一日中さまざまな人と接している「開放的コミュニティ型」とした。

事例4(図8)は、一日のほとんどの時間を食堂や洗濯室などでのさまざまなお手伝い作業に費やしており、日中自室で過ごす時間はかなり少ない。自室周りで人と共に過ごすよりも、施設から与えられた役割活動を行うことに重心を置いていることから、「自室外役割活動型」とした。

事例5(図9)は、一斉プログラムなどで必要のあるときは外に出てくるが、それ以外は自室で過ごしていることが多い。ただし自室の環境がそれほど充実しているわけでもなく、また自室でとくに重要な活動をするわけでもない。他者との接触をなるべく避けようとする「閉じこもり型」とした。

4.3. 入居者の生活類型

対象とした入居者をそれぞれの類型にあてはめると、各類型の入居者数は表8のようにになる。各入居者が施設内に展開する場の性質によって分類したものであり、必ずしも場所での滞在時間と対応するわけではない¹⁸⁾。privateもしくはsemi-publicにおいて自ら積極的に働きかけて自分の場を構築していく自己充実型・自室外役割活動型に比べ、semi-privateにおける他者との関係性の中に自分を定位することのできる開放的コミュニティ型・閉鎖的コミュニティ型の入居者が多数を占めている。また、もっとも個室化の恩恵を受けられる自己充実型や、個室化によって問題にされがちな閉じこもり型に比べ、中間的なタイプである両コミュニティ型が多く見出された。

各類型におけるADL・痴呆程度の分布を見ると(表9)、自室外に重要な場を持つ両コミュニティ型および自室外役割活動型のADLがやや高く、閉じこもり型の痴呆程度がやや重いという傾向は若干見られるものの、それほど顕著ではない。居室との対応関係を見ると(図10)、semi-privateが重要な意味を持つ開放的・閉鎖的コミュニ

(図8) 事例4 71歳女性「自室外役割活動型」

(図9) 事例5 87歳女性「閉じこもり型」

(表8) 入居者の生活類型と人数

類型	モデル図	空間との対応	人数
自己充実型		private空間に充実した環境を形成する一方、自室外の空間のプログラム空間とみなされ、private空間との間には意味的に大きな壁がある。自室の外に自分の居場所が鳥のように形成される場合もある。	3
閉鎖的コミュニティ型		semi-private空間の一部が共有する人たちの親密なコミュニケーションの場としてみなされており、この共有されたsemi-private空間と、その外側との間に意味的な壁がある。	5
開放的コミュニティ型		semi-private空間が出入り自由な自然発生的場となっており、そこでその滞在時間が長い。privateとsemi-private、その外側のプログラム空間に至る意味的ギャップが少ない。	7
自室外役割活動型		自室における活動や交流はほとんど見られず滞在時間も短い。おもにsemi-public空間に自分の拠点となる場を持って活動し、そこで与えられた役割を遂行する。	2
閉じこもり型		自室での滞在時間は長い、個人的活動も他者との交流も少なく、自室の環境形成はさほどなされない。外に出るのはプログラムに参加するときくらい。	3

(図10) 入居者の生活類型と居室の位置
(95年3～8月時点)

(表9) 入居者の生活類型とADL・痴呆程度

類型	ADL(Kats)					痴呆(Berger)			
	A	B	C	D	E	1	2	3	4
自己充実型	1	1	1			2	1		
閉鎖的コミュニティ型	3	2				3	1	1	
開放的コミュニティ型	5	1	1			1	3	2	1
自室外役割活動型	2					1	1	1	
閉じこもり型	1		1	1			2	1	

ティ型に居室位置との強い対応が見られる。南側の共用広間は自然発生的集まりの場が形成されやすく、ここを囲む入居者はこの場に参加することで開放的コミュニティ型が多い。一方東側の共用広間を囲む入居者はその自然発生的集まりの場には参加せず、同郷などの理由で仲の良い入居者同士で親密な関係の場を形成する閉鎖的コミュニティ型が多くなっている。(もちろん南側の入居者の中にも同郷で親しい人はいるが、その人たちだけで親密な場を形成するところはあまり見られず、自然発生的な集まりの場に参加することを選択している。)

これらの生活類型は、それぞれの入居者の生活スタイル・生活要求などを反映していると思われるが、単に人の側の属性のみに起因するのではなく、施設の運営方針や領域性を作り出す空間構成、入居者同士の社会的関係などさまざまな環境要素が強い影響を及ぼしており、人と環境との相互関係によって現れてきたものと言える。このような多様な類型が現れてくることには、privateの確保によって生活の拠点が保証されることも重要であるが、人によって自然発生的集まりや親密な関係の場の形成を可能にするsemi-private、単なるプログラムの空間にとどまらず自主的な目的的活動や個人的活動の場が形成されるsemi-publicなどの共用空間が果たす役割は大きいと言える。

5. まとめ

(1) 施設の個室化に伴い入居者の引きこもりが懸念されているが、対象施設では時間の経過と共に個室での滞在率は次第に減少し、逆に共用空間が増加するという経過をたどっている。すなわち、必ずしも個室化が直接引きこもりを助長するわけではなく、共用空間の質こそが問われる必要があると考えられる。

(2) 施設空間では、あらかじめ与えられた機能通りの行為が見られたわけではなく、とくに施設側のプログラムの及ばない時間・空間において、入居者によってさまざまな空間がさまざまな場の形成される場所として見出され、さまざまに意味付けされていた⁹⁾。また、入居者の行動環境も一律ではなく、空間との対応によってさまざまな生活類型が見出された。その際に、施設の共用空間が入居者同士の関係を結びつける役割を果たしていたが、それは画一的な仕方では無理に人同士を交流させようとするものではなく、人によってさまざまな関わり方を許容するものであった。それは入居者側による選択が可能であり、つまり入居者がコントロールの主体となりうることを示す。

(3) 施設計画では往々にして、運営側によって提供される一斉プログラムと、仲の良い人の小さな集まりだけを想定した空間計画になりがちである。共用空間にさまざまな入居者の居場所があり、いろいろな人が気軽に参加・離脱できるような自然発生的集まりや、時には一人になりながら視覚的・間接的に他者と関わることをサポートするような施設空間のあり方を考えていくべきであろう。とくに新規に入居してくる高齢者にとっては、すでに形成されている親密な関係の場には入り込みにくく、またプログラムによって未知の集団に投げ込まれても溶け込めるものではない。参加する際の心理的関²⁰⁾が低く、次第に他者との関係を深めていけるような場があることは重要である。

(4) 要介護の特養入居者とは言え、その生活の仕方は本来多様であ

る。施設においてその多様性を支えるのは、単に個室の存在のみにあるのではなく、多様に意味付けされ得る共用空間（特に semi-private）が大きな役割を果たしていた。そこでは人による多様な場が展開されており、つまり各入居者が自ら居場所を見出し、そこで自分に合わせた過ごし方をし、コミュニケーションのレベルを選択していた。安定した身の置き所としての個室と、他者や施設環境との接点としての共用空間の双方が適切に機能することによって始めて、入居者が自分らしさを保ちつつも施設環境に適応して安定した関係を形成することができると考えられる。

(5) 本稿では比較的高い自立度の高い入居者を対象にした調査結果をもとに分析を進めたため、自立度の低い入居者や痴呆程度の重い入居者に対する視点の掘り下げが今後の課題として残される結果となった。ただし、自立度の高い入居者にとっての問題は自立度の低下に伴ってより一層鮮明に表れると思われる、その意味からの問題提起にはなったと考えている。また、継続的な調査に基づく時間的な流れの中での環境適応過程の様相や、それを踏まえた施設空間のあり方については次稿で報告する予定である。

註

- *1) 厚生省による新ゴールドプラン(高齢者保健福祉十カ年戦略)によると、1999年までに29万人分の特別養護老人ホームを整備することになっており、現在着実に実績を伸ばして目標をクリアしつつある。
- *2) 入居者のプライバシー意識の高まりを理由に、1995年厚生省による特別養護老人ホームの一人当たりの補助基準面積は、3.3㎡増加して34.13㎡へ、一人当たり居室面積は2.4㎡増加して10.45㎡へと引き上げられた。これに伴い特養の個室化が急速に進むと予想される。
- *3) 文献1参照。
- *4) 文献2・3など。
- *5) 文献4など。
- *6) 本研究はあくまで一施設のケーススタディであり、他の異なる空間構成や運営形態の施設では入居者の環境との関わり方に大きな違いがでてくると考えられる。ただしここでは施設入居者の生活行動の一般化を目指しているのではなく、入居者と環境との関わり方を見ることによって対象施設の環境の持つ価値を見出し、いこうとするものである。
- *7) 対象施設の最も大きな空間的特徴は、O.Newman(文献5)の提唱したprivate～publicの4段階の領域構造を忠実に空間化していることである。Newmanの領域構造は住戸の防御面安全面の視点から住戸の近隣空間を段階的に捉えたものであるが、これを施設空間に取り入れたのはS.Howel(文献6)である。
- *8) 註*10)参照。
- *9) ADL程度はKatzスケールを、痴呆程度はBergerスケールを用いた。それぞれのスケールは以下の通りである。

KatzのADLスケール

- A 食事・排泄のコントロール・移動・トイレ・更衣・入浴の自立
- B 上記の1項目以外は自立
- C 入浴と他の1項目以外は自立
- D 入浴・更衣と他の1項目以外は自立
- E 入浴・更衣・トイレと他の1項目以外は自立
- F 入浴・更衣・トイレ・移動と他の1項目以外は自立
- G 6項目全てに介助を要する
- O 2項目以上に介助を要するが、C・D・E・Fにあてはまらない

Bergerの痴呆スケール

- 1. どんな環境においても自立している
- 2. 慣れた環境においては指導監督なしに自立している
- 3. 慣れた環境においても指導監督が必要だが、指示のみで適切にふるまえる
- 4. 指示するだけでは適切に振る舞うことができず、介助を要する
- 5. 歩くことができる。生活全般に介助が必要。通常の意味ある会話は成立しない
- 6. 寝たきり又は椅子に座らせることができるのみ。言葉には無反応。

- *10) 本論では文献1に倣い、以下のような定義で施設空間をprivate・semi-private・semi-public・publicの4段階の領域に分けて捉えていく。本文ではこれらprivate・semi-private・semi-public・publicという言葉は、すべてこの領域に対応した空間

を示すものとして用いる。

領域名	定義	領域のController
Private zone	入居者個人の所有物を持ち込み管理する領域	入居者
Semi-Private zone	Private zoneの外部にあって複数の利用者により自発的に利用される領域	複数の入居者
Semi-Public zone	基本的に集団的かつ規律的行為が行われる領域（プログラム間の空白時間には個人の自発的行為も行われる）	職員（寮母）
Public zone	内部居住者と外部社会の双方に開かれた施設内領域	職員（管理スタッフ）および地域住民

- *11) 文献8参照。
- *12) アフォーダンスとはJ.J. Gibsonの提唱した概念であり、ここでは環境が人に対してある行為を誘発・促進するような性質を呼んでいる。佐々木（文献9）によると、アフォーダンスとは環境の持つ情報であり、人（動物）はその情報を環境から探索し知覚することで行為を行う。
- *13) 石川（文献10）は、アイデンティティ（自己確認）の方法として「能力」「所属」「関係」の3側面があると述べている。橋（文献1）は能力に相当するものを「主体性」、所属と関係を合わせて「関係性」としている。これは西平（文献11）によるアイデンティティの二重構造にあたる。
- *14) このグラフは15分ごとに個人がそれぞれの領域空間で展開している場をカウントして合計したものを割合で示したものである。一つの場に参加への参加が複数であると重複してカウントされることになるため、単純な時間的割合ではなく参加しているべ人数の割合ということになる。
- *15) *16) 註*10) 参照。この領域分けは単に施設の空間形態のみで決まるわけではなく、当然ながら施設側の運営・ケア体制によって大きな影響を受けることになる。施設のケア体制による入居者への影響については、改めて別個に論じる必要がある。
- *17) 文献8では、「個人と地域の物理的・社会的環境とが互いに影響を及ぼし合いながら作り上げられたシステム」としての「個人的に意味のある環境」を「行動環境」と定義している。本論では施設空間を地域にあたるものとして考えている。
- *18) 各入居者の分類の方法は、以下のように行った。まず共用空間において他者と過ごす場面がよく見られた入居者のうち、「親密な関係」が多いものを「閉鎖的コミュニティ型」、「自然発生的集まり」が多いものを「開放的コミュニティ型」、「目的的活動」が多いものを自室外役割活動型」とした。それ以外の

入居者のうち、「個人的活動」が多かった居室の環境形成が進んでいると思われるものを「自己充実型」、それ以外を「閉じこもり型」とした。

- *19) E. Relphは文献12において、「意味づけられたさまざまな場所こそが我々の世界体験を秩序づけるための要素」であると述べている。人は、場所を体験によって自分なりに意味づけていくことによって、その場所を自分の領域として捉え、さらにそこを拠点として環境との関わりを広げていくと考えられる。
- *20) 場に参加する際に気後れが生じたり決意が必要だったりするような心理的負担の程度の大きいもののほど、心理的な関が高いと考える。文献8参照。

参考文献

- 1) 橋弘志他3名：個室型特別養護老人ホームにおける個室の個人的領域形成に関する研究、日本建築学会計画系論文集500号、pp.89-95、1997.6
- 2) 梁金石他2名：療養生活を送る高齢者の一日の生活実態とその類型化—高齢者の療養環境の適正化に関する研究、日本建築学会計画系論文集466号、pp.37-46、1994.12
- 3) 今井正次他3名：余暇的生活行為から見た長期療養生活者の類型化と生活要求—病院・療養施設の生活空間の計画に関する研究—3、日本建築学会計画系論文集479号、pp.107-115、1996.1
- 4) 高床均他3名：患者の意識や行動の系目的変化に見る入院環境のあり方について—Hospital Geographyに関する研究—2、日本建築学会計画系論文集483号、pp.121-128、1996.5
- 5) O. Newman: Defensible space, Macmillan, 1972
- 6) S.C. Howell: Designing for aging - Pattern of use, MIT Press, 1980
- 7) 井上由起子他3名：高齢者居住施設における入居者の個人的領域形成に関する考察—住まいとしての特別養護老人ホームのあり方に関する研究—その1、日本建築学会計画系論文集501号、pp.109-115、1997.11
- 8) 橋弘志他1名：地域に展開される高齢者の行動環境に関する研究—大規模団地と既成市街地におけるケーススタディ、日本建築学会計画系論文集496号、pp.133-138、1997.10
- 9) 佐々木正人：アフォーダンス—新しい認知の理論、岩波書店、1994
- 10) 石川准：アイデンティティ・ゲーム—存在証明の社会学、新評論、1992
- 11) 西平直：エリクソンの人間学、東京大学出版会、1988
- 12) E. Relph: Place and placelessness Pion Limited, 1976
- 13) 橋弘志他：個室型特別養護老人ホームの共用空間における場の展開—高齢者居住施設における個人的領域形成に関する考察（その6）、日本建築学会大会梗概集、1997

(1997年12月10日原稿受理、1998年4月16日採用決定)